

令和7年度 第1回恵庭市学力・体力向上推進会議 会議録

〔開催日時〕 令和7年11月6日（木）10：00～11：30

〔開催場所〕 恵庭市民会館 1階 第1会議室

〔出席者（敬称略・順不同）〕

委 員／佐々木 英明（北海道文教大学）

高橋 和子（恵庭市PTA連合会）

山口 広宣（恵庭市教頭会）

佐々木 保（有識者）

数井 雅之（学力向上アドバイザー）

平井 梓（恵庭市社会教育委員）

河内 紀彦（北海道ハイテクACアカデミー）

事務局／教育長、教育部長、教育総務課長、教育総務課主幹、教育総務課主査（学務）、教育総務課主査（総務）、教育総務課主査（教職員）、教育総務課主事

〔内 容〕

※議事まで藤野課長が進行（議事より委員長が進行）

1. 開会
2. 委員長挨拶
3. 教育長挨拶
4. 議事 ※事務局より説明

1) 恵庭市学力体力向上推進会議設置要綱について

改正点が1点。設置要綱第2条第1項第1号の所掌事務について、会議の研究および協議事項を「全校の学校改善プランおよび体力向上プランの比較および検証」としていたが、学校改善プランおよび体力向上プランには、各学校の数値データが含まれており、会議の研究および協議事項に適さないため、「各学校の学力および体力の向上を図るための取組み」、に改正している。

2) 学力・体力向上の取組について

①令和7年度全国学力・学習状況調査の恵庭市の結果（概要版）について

本調査は小学校6年生、中学校3年生を対象に、今年度は国語、算数・数学、理科が実施されたほか、生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査を実施。資料では、教科におけるテストの平均正答率を全道全国との比較を記号により表している。中学校理科については、今回初めてIRTを用いた尺度となっており、児童生徒の正答・誤答が難易度や測定精度などの問題の特性によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力ス

コアを測定する統計理論が用いられ、国際的な学力調査（PISAやTIMSS）、英語資格・検定試験（TOEIC・TOEFL）などで採用されているテスト理論となる。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を同じ物差し（尺度）で比較することができ、これまででは問題の難易度の違いから経年で比較ができなかつたものが可能となった。学校や自治体ごとの結果を、500を基準とするIRTスコアとして表示され、個人の結果は5段階のIRTバンドで表示・返却されている。こちらは令和9年度調査から全教科で導入予定である。小学校では、国語は北海道及び全国とほぼ同程度、算数は北海道とほぼ同程度であったが全国をやや下回る状況、理科は北海道及び全国とほぼ同程度の結果となっている。中学校では、国語・算数ともに北海道及び全国をやや下回る状況、理科はIRTスコアが498と基準となる500に近い状況であった。

質問調査の結果を四つのカテゴリーに分類し、全国平均を100とした場合の本市の児童生徒の回答状況を可視化したもの、それに関連する質問項目に対する学校の回答状況で特徴的なものについて説明する。はじめに、主体的・対話的で深い学びに関わって。「対話を通じて自分の考えを深めたり広げたりしている」と回答した児童生徒は全国平均とほぼ同程度だが、「学習課題や活動の工夫」で「よく行った」と回答している学校の割合は全道・全国を下回る傾向があり、更なる授業改善が求められる。次に、ICT活用力について。

「タブレットの使用頻度」に関しては、全道・全国を大きく上回った。一方で児童生徒同士がやり取りする場面での活用など、対話の質を高める活用の仕方という点で改善の余地がある。次に、生活・学習習慣について。「読書が好き」と回答した児童生徒は全国平均を上回っている。一方、「1日当たり1時間以上勉強している」児童が全国を大きく下回った。次に学習に対する興味・関心について。「国語の勉強は好き」と回答している生徒は全国を上回っているが、「算数・数学の勉強は好き」と回答している児童生徒は全国を下回っている。また、「算数・数学の授業の内容はよく分かる」と回答した生徒の割合は全国を大きく下回り、本市において算数・数学が課題となっていることが改めて確認できるデータとなった。

②学力・体力向上の取組について（各委員からの意見について）※学力向上

「標準学力検査（NRT）及び英検IBA・ESGの実施」について、NRTの効果的な活用や教科を追加することの他、英検IBA等の実施の継続の意見をいただいた。次に「ALTの配置及び外国語指導に係る地域人材の活用」について、ALTや外国語専科教員の適正配置や巡回指導、担任教師の授業力向上のため校内研修や小中交流、CSとの連携など英語の指導力強化、向上に対する意見をいただいた。そのうち、「外国語指導に係る地域人材に求めるスキルや資格はどのようなものか」という質問があったが、実用英語技能検定の資格を有しており、小学生向けの英語教室等で指導経験のある方。という回答となる。次に「教職員への研修」について、不登校対策やふるさと教育、校務AI活用、ハイテク実技研修と

といった具体的な研修内容の意見があった。また、サマーセミナー・ワインターセミナーの具体的な内容と現場の先生方のニーズについて質問があったが、具体的な内容について、サマーセミナーは【資質・能力の確実な育成に向けた単元計画の作成】【学校図書館の利活用】【「ほっと」を活用した児童生徒理解】【学校現場における法的対応について】をテーマとした4講座を実施、ワインターセミナーは【緊急時の応急処置に関する知識とスキルを身に着ける】【通常学級における特別な支援を必要とする児童生徒】【生成AIの活用について】【包括的な性教育について】をテーマとした4講座を実施する予定。現場の先生方のニーズについては、ICT・生成AI関連、特別支援教育、不登校支援、授業づくり、保護者対応、働き方改革、地域防災など。毎年度、研修後にアンケートを実施しており、ニーズ把握に勤めている。次に「ICT教育の充実」について、ICT支援員の増員、特別支援学級や体育館への電子黒板の設置、デジタル教科書の配備等のICT機器の設置やそれを活用する教職員向けの研修の充実等の意見をいただいている。情報モラル教育に関して、2点質問があった。

1点目、「ネットリテラシーに関して、保護者の知識不足も大きな課題であるが対策等講じる予定はあるのか」ということだが、年度始めに各家庭向けに『タブレットパソコン使用上の注意事項』や『1人1台タブレットパソコンの持ち帰りとご家庭での利用にあたって』、『恵庭市タブレットパソコン家庭活用ガイドライン』等を配布し、保護者に対しても児童生徒が端末を活用するまでの目的や注意事項等周知・啓発に努めている。2点目、「低学年に対する情報モラル教育の実施例」について、学活の時間を通じてスマイルネクストの教材や、教育委員会で作成した成長段階に応じたテスト形式の低学年向けの情報モラル教材を活用し、ICT支援員や担任が情報モラル教育を行っている。次に「学習支援員等の配置」について、学習支援員や特別支援教育支援員等の配置は効果的であり、更なる充実を期待する意見をいただいた。「学習支援員の学力向上の効果の検証はどのように行われているのか」という質問については、全国学力テストやNRT等の経年の結果を見ることで検証を行っているが、テストの点数による検証だけでなく、学校から「学習支援員がいることで助かっていることができていること」を聞き取り、その効果について判断・検証を行っている。次に「地域による学習指導」について、学生ボランティア継続の意見や地域学校協働活動本部の設置等の地域・学校・子どもたちのよりよい関係を築くための意見があった。また、「実施希望のあった学校に対して、学生などの人材紹介の協力はあるのか」という質問があったが、地域コーディネーターを各校に順次配置しており、地域人材のコーディネートも役割として整理しているため、地域コーディネーターへ相談して頂いている。地域コーディネーターを配置していない学校においては、社会教育課にて都度相談を受け、対応している。

③学力・体力向上の取組について（各委員からの意見について）※体力向上

次に「体力向上プランの作成」について、運動嫌いに対しての運動環境づくりへの意見や教職員向けの研修の実施等の意見があった。質問について、1点目「体力向上プランの効果についてはどのように評価しているか。効果があった取り組みを全校で共有する機会はあるか」については、各学校で年2回、教職員、保護者、生徒アンケートを評価の指標として評価を行っている。また、取り組みの共有について、各校の非公開データが含まれていることから全校で共有する場は設けていないが、指導主事が全校を訪問し、提出された体力向上プランの各校の取組みについて、必要な学校に提供しているところである。2点目「中学生の体力測定結果」については、第1回目の会議資料に掲載しているが、多くの種目で全国・全道平均とほぼ同等であり、20mシャトルラン、立ち幅跳び等の一部の種目で全国・全道平均を上回っている。次に「体育授業への支援」について、こちらはハイテクACによる指導者派遣やスキーや水泳等の専門講師の派遣の増員や小中高校の連携について意見があった。次に「恵庭市小学校等体育実技研修会の実施」について、こちらは参加教員の安全な受講のため研修の内容や開催時期について意見があった。次に「小学校水泳授業における民間プール施設等の活用」について、こちらは民間プール施設や指導者の活用に肯定的な意見や、水難事故防止に向けた安全教育の実施についての意見や小学校プール施設に係る質問があった。「小学校のプールを今後どのくらい維持していく予定か」という質問であるが、現在小学校のプール（恵庭小、和光小、若草小、恵み野旭小、島松小）5校は、市民プールとして設置されており、それを自校での水泳授業として利用している。市民プールの配置は現行の配置で維持される考え方と聞いており、市民プール設置校については、現時点では今後も自校での水泳授業を実施する考え方でいる。次に「部活動指導員の配置」について、こちらは取り組みについての成果や部活動指導員の人材確保に関する意見をいただいている。そのうち2点の質問について、1点目「人材確保について自衛隊があるに協力を求ることはできないか」について、選択肢の一つとして考えていきたいと思う。2点目「部活動配置の効果をどのように図る予定なのか」について、学校へのヒアリングや担当顧問の時間外在校等時間の把握、専門性を有する顧問の配置状況についても確認が必要と考えているところである。最後に「部活動の地域移行」について、こちらは地域移行の進め方や課題に関する意見をいただいている。また、質問について1点目、人材バンクの募集の方法であるが、恵庭市スポーツ協会HPで募集している。2点目、昨年度の新規登録数は9名となっている。3点目、競技種別登録者数は、サッカー：3名、バスケットボール：1名、バレーボール：2名、剣道：1名、ソフトボール：2名、軟式野球：1名となっている。4点目、中学校での指導について、各校の状況次第ではあるが、競技に直結するものだけでなく、トレーニングやコンディショニングを含めて指導している学校もあると聞いている。

【質疑応答・意見交換】

G委員：学力向上の学習支援員等の配置について、こちらアンケートを取られたとお聞きしたが、その配置の結果については、何かに公表されていたか。

事務局：外には出していない。

G委員：それについては、委員の我々は見れたほうがいいのではないかと思う。部活動指導も学習指導も人員確保が必要なのはわかるが、どれくらい必要か。というところがわかると、本件を進めるにあたり大変ありがたい。

事務局：どのように公表するのかも含めて、検討させていただく。

A委員：全国学力・学習状況調査の結果を見て感じたこと 2 点について。

1 点目、小学校国語、算数においては全道全国平均のほぼ同等程度、算数においては全国平均よりやや下回る。という結果になっているが、一方中学校になるとそれが落ちている。これについて前回会議で、なかなか中学生の学習時間の確保が生徒の生活環境の中で難しい。という話があったが、支援員の配置数について、小学校はかなり手厚いのではないかと推測されるが、中学校においてはどのような程度のものなのか。国語や数学においての個別の関わりの様子というのがあれば、お聞かせいただきたい。

2 点目、対話を通じて自分の考えを深めたり広げたりする。また、ICTにおいても同様の課題がでており、昨今の教育の状況からするとおのずと出ている全国一律の課題かなというふうに思うが、これらによって非常に先生方の対応的な授業の割合が落ちているのではないかというのが一点、ICT活用によってかなり基礎学力を向上するという方にクローズアップされている点がある一方で、今年の文部科学省の公示された検討課題からすると、(二項対立) ICTか、今までの授業を大事にするか、ではなくてどちらも大事にしていき、対話的で深い学び、子供たちの学び合いを大事にした授業のクローズアップといったものも今後必要になってくるのではないかと思っている。

事務局：支援員の配置状況について、市内では現在 2 種類の支援員を中学校に配置している状況。1 つは、学習支援員ということで、数学に特化して指導していただいている状況。市内での配置校は 2 校。人数は 1 名ずつ。こちらについては毎年度全国学力・学習状況調査や NRT の結果をもとに効果的な配置について検討している。

もう 1 つは、特別支援教育支援員と呼ばれるもので、各校 2、3 名程度全校に配置されている状況。こちらは、普通学級と特別支援学級のどちらでも指導が可能であり、基本的に日常生活の介助や、学習支援をしていただいている。

事務局：補足。特別支援教育支援員は、各学校の困難なお子さんへの支援、また学習面で遅れのある子に寄り添う、あるいは不登校の子どもたちを学校の中で支援するのに、支援が必要なところに自由に使ってください。ということで各学校へアナウンスしている。そ

といった使い方をされているというのが多いと聞いている。

事務局：2点目について、現行の学習指導要領に求められている主体的対話的で深い学び、そういった学習指導要領の趣旨に乗っかりながら、同時に現行の学習指導要領が告示された数年後に答申の中で、個別最適な学び等のG I G Aスクール構想の推進についても国として示されたという経緯がある。恵庭市のI C Tが活用されているかというところにフォーカスをすると、非常に活発に活動されている現状がある。

ただ学校の認識として、その活用が子供たちに資質能力の定着に資する内容として効果を発揮しているかと言ったときに、課題の設定も含め、今学校の中でそこに課題意識を持っている。現状先生方は概ね使えるようになってきているため、今度はそれが子供たちに力がしっかりとつくような効果的な活用のあり方について各学校および恵庭市はもとより石狩管内全体で、道教委の指導も受けながら進めているという状況である。そういった中で、I C Tの活用はあくまでも方法論のため、ゴールがどこにあるのかということを最近私どもも学校と協議するときに、指導要領に忠実にその目標内容を捉えながら、それに資する活用の仕方を進めていきましょうという中で、学校によってはその部分でアウトプットが非常に求められる授業場面だが、話の聞き方や、聞いているときの姿勢だとか学習規律というところに改めて着目をし、子供たちも授業の中での集中度が高まっている取り組みであったり、インプットが正確になされることで、その後の子供たちの協働的な学びや対話的な学びがより目的に照らした効果的な学びの姿が見られるなどの成果も出てきているということもあり、そういった実績について、各学校にも提供させていただいている状況である。

事務局：補足。恵庭市内で小中それぞれ毎年課題研という研究発表会を行っているが、I C Tについては先生方にとって非常に良い授業をしてくれている。一方、たまに聞こえてくるのが、残念ながら時間の配分がうまくいかなく最後尻すぼみになってしまったり、会話の場面が取れなかったり、昔ながらの授業をしている先生も多少はいたりと、各学校課題に感じていただいている。

委員長：特別支援教育支援員について、私が行っている恵明中学校でも3名おり、使い方を色々と工夫していいということで、教室に中々入れない子どもたちの支援センターのような教室（慈愛の森）に1名来てくれているが、非常にいい動きをしてくれている。良さとして、クラス・担任との距離が近いこと、学びの森や、ふれあいルームと違って、その繋ぎを実によくやってくださることで、担任の先生がよく顔を出してくれたり、授業によっては子どもが教室に行って受けたりすることもできている。さらに、定期テストだけではなく、単元テストや章末テストもどんどん受けるようになることで、そのことがまた一つのきっかけになって学習意欲も高まる。その繋ぎの部分がすごく大

切だと感じている。そこを丁寧にやることによって、子どもも意欲が湧き、担任の先生方も一生懸命目を向けてくださるようになるということでは恵庭市の中で各学校に配置してくれてさらに使い勝手も良くしてくださっていることが本当に大きな効果を上げながら進んでいるなど感じている。

G委員：例えば中学校でいうと数学の専門の先生がいて、その先生が数学の授業（指導）を行うところに、学習支援員が補助で入るという形かと思うが、そもそもなぜ支援員入るのか。なぜ必要なのか。なぜ各校にいなくて、その学校だけに1人入る必要があるのか。なぜ数学なのか、伺いたい。

事務局：基本的には予算事業なもので、本当は潤沢に全校に入れればいいが、これまでの学力調査等の分析から、重点的に支援をしてあげたい学校をピックアップしながら、教科については特に算数・数学が課題で、そして小学校のときの算数がそのまま中学校に積み上がりしていくという課題があるので、課題になる小学校算数のところに特化しながら、必要な予算の枠の中で支援をさせていただいている。その方々の動きについて、授業の中で30人40人が一緒に勉強すると1人の先生が授業をやっていて、ついていける子供もいるが、中には個別の支援が必要な子供も教室の中にはいる。昨今特に特別な教育的な支援を必要とする子供たちも通常の学級の中にも一定程度在籍することがわかってきていため、そういう子供たちも含めて学習について行けるように、メインとして授業を進めている先生のサポートということで、子供の支援にあたっているという動き方が中心になっている。

G委員：毎年、学校は変わらぬか。

事務局：毎年検討はしているが、あまり大きくは変わっていない。

G委員：その支援員は1週間で数学の授業をポイントで行く感じになるのか。

事務局：学校の中で特定の学級に入れたり、また複数校兼務していたりするため、学校を回ったりということになる。

G委員：であれば、1度も出会わない生徒もいるかもしれないということか。

事務局：仰る通り、直接的に支援を受けない子供も出てくるかもしれない。ただ、そこは学年の先生方とも上手に連携をしながら、どのクラスの誰にサポートに入ったらしいのかを情報共有しながら動いているため、基本的に学校として必要な子供に当たってもらうという体制については取れていると思う。またそれらの支援の状況についても、ノート等にまとめるなどして、先生方の中で供覧をし、どういう支援を行っているかが校内全体で共有できるような取り組みにも繋がっている。

G委員：この取り組みは大変素晴らしいことだなと思う。やはり体育の授業に行っても思うが、45分、50分の中で全部を見切る絶対無理だと感じる。将来的な方向性として、

全学校・全教科を想定しているのか。資料を見ると令和5年度に1名で、令和6年度に2名という形で増えていると思うが、将来的なことをお聞きしたい。

事務局：この取り組みについては、ギリギリ認められている現状である。結果として全国平均を下回り続ける。ということがあれば、切られてもおかしくない状況ともいえる。小学校では専科教員というのもいるため、そことのコンビネーションも考えながら進めていきたいと考えている。校長会を中心に各小中学校で算数・数学の成績を上げようという取り組みをしていただいているため、期待して今後に繋げていきたいと思っている。

F委員：授業の内容がわかっているが、好きではない。という結果が顕著に出ていると思った。小学生の頃から好きじゃないから、中学生になったらどんどんわからなくなっていく結果なのかなというふうに親目線で感じた。理系の苦手感というのは理系の進路が優遇されている今、すごく損をしてしまうのではないかと思う。理系では算数が基礎であり、そこから数学に繋がっていくため、数字を上げていくということが大事。その前に何か算数を好きになるような取り組みみたいのがあったらいいのかなと思うが、その点お伺いしたい。

事務局：自分なりにゴールにたどり着けたり、求められている答えが導き出せるというところが成功体験として積み上がり算数が好きになるが、問題を出されて意味がわからない、計算ができないという子供はきっと好きにはならないだろうなというふうに思っている。やはりある程度基礎基本の部分の学年層の内容をしっかりと積み上げていくことがすごく大切になると思っており、その中で最近出てきている取り組みの中では教員だけではなく、基礎基本いろんな計算問題、練習問題を、コミュニティ・スクールや学校運営協議会の力も借りながら、地域の方々が実際に学校に入りミニテストを実施し、お母さん方がそれを採点して、採点した結果を学校の掲示物にして、励ましのコメントを書いて子供たちを激励しながら取り組みスタートしているという様子も見られており、最終的にはある程度子供たちが必要な知識や技能を身につけていけるというところがやはり大事だと感じている。

E委員：自分も小中学校の頃を振り返ってみていたが、成功体験や、成就感、達成感はものすごく大事なことだと感じる。中学校の頃、図形の証明問題の宿題を出されたが、それを必死になって取り組み、長時間考えてやっと出来た。その出来たこと、達成したことを誰かに伝えたくて、親に喜びを伝えたことがあった。こういう成功体験、達成感があると、「自分はできる」という自信となり、そこから苦手科目が好きになっていくと自分の経験から思う。数学は特に答えが一つで、考え方は様々でも答えは一つ出てくる。それを求めるというのは、色々な考え方をする上でとても大事な評価だというふうに思う。しかし、それが中々難しい。でもそこが達成できたときに、より大きく子供たちが伸びていくのか

なと思う。ただ、難しいので時間はかかってしまう。そのため、家庭学習の時間を少しでも確保することは必要。中学生は特に部活動や塾などもあると思うが、わずかな時間でも勉強に向かう習慣が、継続に繋がっていくと思う。

委員長：私が慈愛の森の子供たちに最初に取り組ませるのが、数学である。数学は、できた。という思いを一番与えられやすい。ただ、当然中学には1年生2年生それぞれの学習指導する内容があり、これを一斉指導の中で行われていたら、難しいだろうなという子供もいる。とりわけ数学は個別指導がすごく重要で、一度わかると意欲が一気に出てくる。そのため各学校に支援の先生方を配置してくれているというのが本当にありがたいなと思っている。

委員長：体力向上のほうに話を移すが、部活動の地域移行は現在どの辺まで来ているのか。

事務局：国より、来年度からは土日の地域移行、地域展開という形を目指そうというロードマップに沿った方向性も出された。現在がその前年の令和7年度ということで、それに向けて地域の受け皿となる情報収集や、人材確保の部分で各団体との協力を得て、取り組んでいる状況。それ基に令和8年度以降、いくつかでも特に土日に地域の協力を得た活動ができないかということを議論している段階である。

事務局：補足。国より、保護者負担の在り方、地域展開する受け皿の地域クラブの認定方式等について12月を目途に出す。というふうに言われているため、それらがはつきりしてくると、それをベースに地域展開の制度設計を議論していくという段階にある。

事務局：8年9年10年の3か年で、まずは土日の地域展開から着手し、次の3か年で更に推進するということで、自治体のほうに求められている状況となっている。

A委員：プールについて、5校のプールが市民プールとして活用されているということであったが、プールの開放時期について、運営者について、利用状況について伺いたい。また、体育館の利用状況も伺いたい。というのも、子供の体力向上が図られてきているという現状で、今後運動の日常化ということを考えたときに、開放事業が活発になり、家族での利用や、地域の方の利用が活発になっていくと世代を超えてみんなが運動をする習慣がついてくるのかなと感じた。

事務局：プールの運営については、教育委員会とは別の恵庭市保健福祉部が所管で運営している。水泳の授業については学校ごと多少のずれはあるが、夏休み前から8月いっぱいまでという認識でいる。体育館の利用状況については、体育館の開放ということで一般開放というイメージで解釈したが、そちらの管理についても、同じく恵庭市保健福祉部が学校管理から切り離して、市民への一般開放ということで運営している。時間区分としては、17時から19時まで、19時から21時まで、の区分があり、17時から19時までは

主に少年団活動の利用が多く、19時から21時までは大人（成人）の一般利用が多い印象である。

委員長：D委員、本会議を通して、なにかないか。

D委員：先ほど話にもあったが、子供たちが楽しい。と思えることを考えていかないと成績アップや家庭学習に繋がっていかないと教員の立場からも感じた。ICTの活用等も含めて対話の質の向上について話に出てきたが、やはりどんなに対話をさせようと思っても、個人がしっかりと考えを持って、それを表明できる力をつけていかないと対話の質も向上していかないため、まずはここをしっかりと取り組んでいかなければいけないと学校の中で研究を進めているところである。本校、図形と測定が少し弱く、苦手であるが、そういう体験的な活動をする時間が非常に少なくなってしまったのかなと思う。もしかしたらICTの弊害なのかもしれないなというところも若干感じているところではあるが、何とかそこを埋められるように体験的なところもたくさんやりつつ、楽しい算数を目指しながらやっていきたい。また、先生方は子供たちの進路に責任を持つというのを考えると、今回の学力テスト等をなぜやっているのか。を先生方がしつこく来ていないところがもしかしたらあるのかもしれない。この先中学、高校に行ってレベルが上がることを考えると、やはり小学校と中学校がしっかりと連携をしていき、やらなければいけない理由を、子供たち・保護者だけではなく、先生方もしっかりと知って、その上で小学校の学習を進めていかなければいけないということを学校の中でも話をしているところである。

委員長：B委員、本会議を通して、なにかないか。

B委員：通常学級にいるが、支援が必要な子どもに対して、全部を対応するのは難しいと思うが、今以上に少しでもその子供たちに寄り添った対応を検討していただけたら嬉しい。また、子供が今やりたいと思っていることに対して応えてもらえるような環境作りを今後もしていただきたいと思う。

7. 次回の会議日程について

事務局より、次の内容について説明

【説明要旨】

次回の会議は2月頃を予定している。候補日が確定次第改めて出欠の確認をさせていただく。

8. 閉会